

英語学習者対象の出張劇団 “White Horse Theatre” 視察報告
—Theatre in Education(TIE)の効果とそれを高める事前事後の指導

塩沢泰子 (文教大学)
齋藤安以子 (摂南大学)
草薙優加 (鶴見大学)

ドラマを活用したコミュニケーション力と「生きる力」を育む英語教育に関する研究 (科研課題番号 26381223) の一環として、2015年9月初旬に筆者らは、ドイツに本拠地を置く英語学習者を対象とした欧州最大手の出張劇団である White Horse Theatre を訪問し、ドイツでの本番直前の練習の様子を観察・録画し、関係者へのインタビューをする機会を得た。長年に亘って成功を収める同劇団の代表グリフィス氏や監督たちの言葉を含め、TIE の効果ならびにそれを確実にする方法について示唆を得たので、動画などを用いて報告したい。

当初は英国人対象であった同劇団は、約30年前からドイツの小・中・高の英語学習者を対象とした出前劇団に進化し、今や国内外で活躍する。作品はグリフィス氏によるオリジナルで、英語レベルも調節され、演目はシェイクスピアから社会問題、児童文学など多岐にわたる。また、外国語として英語を学ぶ観客のため、毎年ロンドンで厳しいオーディションによって選抜される役者たちには、役者としての資質に加え、明瞭な発音と人間関係力が要請される。本劇団は聴衆とのコミュニケーションを重視し、聴衆とのライブのやりとりを劇中に含めたり、台本の設定を微修正するなど様々な工夫をしている。このような同劇団の芝居は本物でありながら、外国語学習者が理解できる言語で進行し、かつ内容は共感できるもので、学習意欲を大いに高めてくれる。

一方、本格的な劇を観ることによって得る豊富なインプットも、出張公演を招待した教育機関側での十分な教育的配慮を持つ準備やフォローアップなしでは効果が半減する。言語材料だけでなく、演劇の時代背景や登場人物の心理とボディーランゲージの関係などについて、事前のワークショップを実施することが肝要である。段階を踏んだウォームアップ活動はスキーマを高めてインプットを効率的に取り入れることにつながる。また、観劇後のフォローアップでは、異文化や社会問題等、劇のテーマを考え、言語化することが非常に有効である。問題となるシーンの再現や、ディスカッションやディベートなどアウトプットを行うことにより、TIE がさらに総合的な教育活動となり得る。本発表では、観劇前と後の学習活動例も紹介したい。